

空海の著作における五相成身観について

浅井 宣雄

はじめに

弘法大師空海は著作の中で、様々な経論を引用し、自らの論理を展開している。これは特に『十住心論』において顕著であり、『三教論』や『即身義』でも典拠として様々な經典、儀軌、論疏が引用されている。空海は著作中における経論の引用に際し、全文そのままの引用を行う場合もあるが、意図的に原文を改変して引用を行うことが少なくない。意図的に改変して引用を行うということは、ある意図を持って引用を行うということであり、引用した部分に対する空海の解釈が示されるということである。すなわち、引用文と原文の差異に空海の見解が端的に示されていると考えられる。本稿では『十住心論』と『秘蔵宝鑰』における五相成身観に関連する部分を踏まえた上で、『即身義』の二経一論八箇の証文の第四句における『三摩地法』の引用について考察を加える。そして、空海の五相成身観に対する見解を明らかにしたいと思う。

一、空海の著作における五相成身観について

空海の著作には金剛頂經系の經典、儀軌が数多く引用されている。そのうち、五相成身観に相当する部分が引用されている箇所は『即身義』、『十住心論』、『秘藏宝鑰』にみられる。しかし、『十住心論』と『秘藏宝鑰』の引用箇所は一切如来が一切義成就菩薩に対して五相成身観を説示する直前までであり、五相成身観の内容は言及されていない。また、『秘藏宝鑰』の第十住心において、『菩提心論』の引用を行い、間接的ながら五相成身観の内容を示している。しかし、空海はそれ以上の言及を避け、『教王經』や金剛頂經系儀軌で示されている五相成身観の真言等は示していない。一方、『即身義』における引用箇所は、二經一論八箇の証文の第四句である。『即身義』では五相成身観の第四段階である証金剛身の部分が引用されており、五相成身観の内容の一部に触れている。つまり、空海の著作において、五相成身観の行法の部分が引用されるのは『即身義』だけである。

一、『十住心論』における五相成身観について

『十住心論』において五相成身観に関する箇所が引用されている部分は第九住心にみられる。第九住心では『大日經』、『大日經疏』、『華嚴五教章』の引用に続き「據大日經及金剛頂經等云。」として以下のように引用される。

時婆伽梵大菩提普賢大菩薩住一切如來心寂滅無相平等究竟眞實。時金剛界一切如來現受用身彈指驚覺告

曰。善男子。汝所證是一道清淨。未證祕密金剛三摩地。勿以此爲足。時一切義成就菩薩。由一切如來驚覺。即從無色身三昧起。禮一切如來白言。世尊如來教示我所行道。云何修行云何是眞實。一切如來異口同音告彼菩薩言。善男子。當住觀察自心三摩地⁽¹⁾。

この引用の大部分は取意の引用である。比較のため、この箇所に対応する『教王經』の原文を引用する。

婆伽梵大菩提心普賢大菩薩。住一切如來心。時一切如來。滿此佛世界。猶如胡麻爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩摩訶薩坐菩提場。往詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上正等覺菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩摩訶薩。由一切如來警覺。即從阿娑頗娜伽三摩地起。禮一切如來。白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是說已。一切如來異口同音。告彼菩薩言。善男子當住觀察自三摩地⁽²⁾。

『十住心論』の引用箇所と『教王經』の原文を比較した場合、文章の長さは大きく違わない。つまり、空海が取意の引用とした理由は、省略のために取意引用にしたのではないと考えられる。空海の取意の文章と『教王經』の原文を比較した場合、幾つかの意図的な改変がみられる。『教王經』では一切如來の満ちる場所が「此佛世界」と示されるが、『十住心論』では場所が示されない。同じく、一切義成就菩薩の座している場所が「菩提場」と示されるが、『十住心論』では場面の概念自体が示されない。つまり、『十住心論』の記述では「一切如來が一切義成就菩薩のいる場所へ現れた」という状況が述べられていない。言い換えれば、一切如來と一切義成就菩薩の対話のみが述べられるのである。しかし、『十住心論』のこの部分は「自心を觀察する三摩地に住すべし」と説く箇所であり、一切如來の説示する内容のみが示されれば良いのであって、詳しい場面状況は蛇足とも言える。従って、空海は意図的に場面状況を省略したと考えられよう。

第九住心で引用された『教王經』の場面は、正宗分の最初の部分である。すなわち、法身毘盧遮那如來の

受用身である一切如来が、菩提場に座している一切義成就菩薩に対してその姿を示現して驚覚させる箇所である。しかし、『十住心論』の引用は、一切如来が一切義成就菩薩に対して五相成身観を説示する直前で終わっている。『教王経』の引用部分の直後は以下の通りである。

以自性成就眞言。自恣而誦

唵質多鉢羅底微騰迦嚕弭

時菩薩。白一切如来言。世尊如来我遍知已。我見自心形如月輪。⁽³⁾

空海が引用を打ち切った直後に、通達菩提心の眞言が述べられている。つまり、空海が『十住心論』で示した箇所での引用を打ち切ったことは意図的であると考えられる。そして、『十住心論』では、『教王経』引用の直後、次の様に述べられる。

從此已後説五相成身眞言。由此五相眞言加持得成大日尊身。如是明證非一恐繁不述。⁽⁴⁾

つまり、五相成身観による大日如来との加持の境界が示されるが、その状態に至る方法である五相成身観の具体的内容や、五相成身の眞言は示されない。つまり、空海は「自心を観察する三摩地」を示すためだけに『教王経』を引用したのである。この「如是明證非一恐繁不述」とは、この第九住心において、五相成身観の行法による三密加持を説示する意図を全く持っていないことを明言している。

三、『秘蔵宝鑰』における五相成身観について

『秘蔵宝鑰』において五相成身観に関する箇所は第九住心と第十住心に見ることができる。

第九住心において『教王経』が「金剛頂經説。」として引用される。引用箇所は以下の通りである。

薄伽梵大菩提心普賢大菩薩住一切如來心。時如來滿此佛世界猶如胡麻。爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩坐菩提場。往詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上正等覺菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩。由一切如來警覺。即從阿娑婆那伽三摩地起。禮一切如來白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是說已。一切如來異口同音告彼菩薩言。善男子當住觀察自三摩地。以自性成就眞言自恣而誦⁽⁵⁾。

該当する『教王經』の原文は以下の通りである。

婆伽梵大菩提心普賢大菩薩。住一切如來心。時一切如來。滿此佛世界。猶如胡麻爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩摩訶薩坐菩提場。往詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上正等覺菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩摩訶薩。由一切如來警覺。即從阿娑頗娜伽三摩地起。禮一切如來。白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是說已。一切如來異口同音。告彼菩薩言。善男子當住觀察自三摩地。以自性成就眞言。自恣而誦⁽⁶⁾。

『秘藏宝鑰』の引用は、ほぼ原文通りである。意図的な改変は見られない。『秘藏宝鑰』と『十住心論』に引用された『教王經』の原文は同じ部分である。しかし、『秘藏宝鑰』では最後に「以自性成就眞言。自恣而誦」を加えた形で引用されている。『十住心論』では、第九住心における『教王經』の引用後、第十住心の最後に至るまで五相成身観に関して全く触れられない。一方、『秘藏宝鑰』では、第十住心で『菩提心論』を用する形ながら、五相成身観に関して触れる箇所がある。このため空海は、第九住心において「五相成身可追尋」と述べたと考えられる。それに従い『教王經』原文で五相成身観の眞言を示す部分である「以自性成就眞言。自恣而誦」の部分を『秘藏宝鑰』では削除せず、引用を行ったと考えられる。つまり、第十住心において『菩提心論』の引用を行って間接的に五相成身観を示すため、『秘藏宝鑰』の『教王經』の引用部分に

は場面状況を加え、さらに真言を誦ずるという行為の部分を残したと考えられる。

第十住心における五相成身觀に関する部分は『菩提心論』三摩地段的引用部分である。この『菩提心論』三摩地段は『教王經』が引用された部分である。「如金剛頂瑜伽經說。」として以下のように引用される。

一切義成就菩薩初坐金剛座取證無上道。遂蒙諸佛授此心地然能證果。⁽⁷⁾

この「金剛頂瑜伽經」は『教王經』の取意引用である。この意味内容に対応する部分は以下の通りである。

婆伽梵大菩提心普賢大菩薩。住一切如來心。時一切如來。滿此佛世界。猶如胡麻爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩摩訶薩坐菩提場。往詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上正等覺菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩摩訶薩。由一切如來警覺。即從阿娑頗娜伽三摩地起。禮一切如來。白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是說已。一切如來異口同音。告彼菩薩言。善男子當住觀察自三摩地。以自性成就眞言。自恣而誦⁽⁸⁾

つまり、『菩提心論』の『教王經』の取意引用の場所は、『十住心論』と『秘藏宝鑰』に引用される『教王經』と殆ど同じ箇所である。しかし、この『菩提心論』が説示する箇所も「以自性成就眞言。自恣而誦」までを取意引用としており、五相成身觀には触れていない。

『十住心論』において、「五相成身」という言葉は、第一住心において「未入三祕密五相成身四種曼荼究竟眞實金剛心殿。」⁽⁹⁾という箇所、第九住心において「從此已後説五相成身眞言。由此五相眞言加持得成大日尊身。」⁽¹⁰⁾という箇所において使われている。しかし、五相成身及び五相成身觀の内容に関する説示はなされない。一方、『秘藏宝鑰』では『菩提心論』の引用文中であるが、五相成身觀の内容に関して触れる箇所がある。『菩提心論』の引用文中で五相成身觀に触れている箇所は以下の通りである。

空海の著作における五相成身観について（浅井）

凡修習瑜伽觀行人。當須具修三密行證悟五相成身義也。所言三密者。一身密者。如結契印召請聖衆是也。二語密者如密誦眞言令文句了了分明無謬誤也。三意密者如住瑜伽相應白淨月圓滿觀菩提心也。次明五相成身者。一是通達心。二是成菩提心。三是金剛心。四是金剛身。五是證無上菩提獲金剛堅固身也。然此五相具備方成本尊身也。其圓明普賢身也。亦是普賢心也。與十方諸佛同之。亦乃三世修行證有前後。及達悟已無去來今。凡人心如合蓮華佛心如滿月。此觀若成。十方國土若淨若穢。六道含識三乘行位。及三世國土成壞衆生業差別。菩薩因地行相三世諸佛悉於中現。證本尊身滿足普賢一切行願。⁽¹¹⁾

『十住心論』では「五相成身」と述べるだけで内容が示されなかったが、『秘藏宝鑰』のこの箇所では「次明五相成身者。一是通達心。二是成菩提心。三是金剛心。四是金剛身。五是證無上菩提獲金剛堅固身也。」と示され、五相成身観の五段階の内容が明かされる。しかし『菩提心論』では『教王経』や金剛頂経系儀軌で示される五相成身観の眞言等は示されない。すなわち、『秘藏宝鑰』においても、五相成身観の行法は詳述されないのである。

なお「五相成身」もしくは「五相」という言葉に加え、五相成身観の内容に関して触れている箇所を『秘藏宝鑰』以外の空海の著作に求めた場合、『金剛頂経開題』に見ることができる。『金剛頂経開題』の五相成身観に関する部分は以下の通りである。

所謂金剛界大曼荼羅。併説毘盧遮那佛受用身以五相現成等正覺五相者。一通達本心。二脩菩提心。三成金剛心。四證金剛身。五佛身圓滿。此則五智通達。⁽¹²⁾

『金剛頂経開題』においても、五相成身観の五段階は示されるが、『秘藏宝鑰』と同じく五相成身観の眞言等は示されない。すなわち、空海の著作において、五相成身観の内容が説示される箇所は無いということを指摘しておきたい。

四、八箇の証文の第四句における問題の所在

『即身義』の八箇の証文は金剛頂經、『大日經』、菩提心論の三つの經論から即身成仏の典拠を示すものである。そして、八箇の証文の第四句は、金剛頂經における重要な行法である五相成身觀を引用し、即身成仏の境界を述べたものとされる。しかし、『即身義』における五相成身觀の引用は第四段階である証金剛身の部分だけであり、五相成身觀全体が述べられていない。

また、八箇の証文における『三摩地法』の引用は、『三摩地法』の原文からの忠実な引用ではなく、一部を意図的に削除した上で引用されたものがある。本稿では『即身義』での五相成身觀、証金剛身の引用の意図と、『三摩地法』引用において、ある一部分を削除した意図を、末釈を踏まえた上で検討していきたいと考える。また、なぜ、五相成身觀を引用する上で、『三学録』において金剛頂宗經の筆頭に挙げられている、いわゆる三卷本の『教王經』ではなく、『三摩地法』を引用したかを検討したい。

五、『即身義』の引用箇所と『三摩地法』原文の違いについて

まず、八箇の証文の第四句の部分と、引用元である『三摩地法』の原文を比較検討したい。『三摩地法』は『即身義』において次のように引用されている。

應當知。自身即爲金剛界。自身爲金剛。⁽¹³⁾堅實無傾壞。我爲金剛身。

これに対し、『三摩地法』の原文であるが、比較検討のため、引用箇所の省略部分と前後を含め、左記のよ

空海の著作における五相成身観について（浅井）

うに引用する。傍線で示した部分が『即身義』で引用されている箇所である。参考のために『即身義』に引用された箇所の前後も併せて参照して頂きたいと思う。

汝於淨月輪 觀五智金剛

令普周法界 唯一大金剛

應當知自身 即爲金剛界

唵麼折囉怛麼句含

自身爲金剛 堅實無傾壞

復白諸佛言 我爲金剛身

時彼諸如來 便敕行者言

觀身爲佛形 復授此眞言⁽¹⁴⁾

加えて、「三卷本の教王經」を併せて引用する。これは右記の『三摩地法』に該当する意味内容の部分である。『三摩地法』は偈頌形式のため、三卷本の該当部分よりも、文字の分量としては少なくなっている。このため、この箇所の意味内容の理解のため、「三卷本の教王經」の該当箇所を参照して頂きたいと思う。

菩薩白言。世尊如來我見月輪中金剛。一切如來咸告言。令堅固一切如來普賢心金剛。

以此眞言

唵嚩日羅怛麼句哈

所有遍滿一切虛空界。一切如來身口心金剛界。以一切如來加持。悉入於薩金剛。則一切如來。於一切義成就菩薩摩訶薩。以金剛名。號金剛界。金剛界灌頂。時金剛界菩薩摩訶薩。白彼一切如來言。世尊如來我見一切如來爲自身一切如來復告言。是故摩訶薩。一切薩埵金剛。具一切形成就。觀自身佛形。以此自

性成就眞言。隨意而誦⁽¹⁵⁾

繰り返しになるが、この『即身義』の引用箇所は、『三摩地法』の原文と違いが認められる。また、引用された箇所は独立したひとつの行法ではなく、『三摩地法』において五相成身觀を述べる部分の一部である。『即身義』の引用部分は『三摩地法』の五相成身觀の第四段階、証金剛身の眞言を唱える直前と、眞言を唱えた直後の部分である。つまり、証金剛身の眞言「唵麼折囉怛麼句含」と、諸仏に対する呼び掛けである「復た諸佛に白して言さく」の部分が意図的に削除されている。

この諸仏に対する呼び掛けが削除されたことに関しては、宥快や小田慈舟も指摘する所である。宥快は『即身義鈔』において、次の様に指摘している。

一。此經文初已成諸佛示詞也。我爲金剛身一句。行者證得相白諸佛詞也 自身者行者自身也⁽¹⁶⁾
 宥快はここで「われ金剛身となる。」の部分が、行者の言葉であることを指摘している。

また、小田慈舟は『十卷章講説』において、次の様に述べている。

この儀軌の文は空中の秘密仏と行者との問答体になっている。「応当に知るべし」等の四句は仏の垂誡、終わりの「我れ金剛身と為る」の一句は、行者が自ら証得したことを空中の仏に告げる言葉である。⁽¹⁷⁾

本稿では、さらに詳しくこの『三摩地法』の引用箇所と言及したい。『三摩地法』の該当箇所を内容的に見た場合、削除されている眞言の直前部分である「まさを知るべし。自身すなわち金剛界となる。」と、眞言の直後である「自身金剛となりぬれば、堅実にして傾壞なし」の部分は、諸仏が行者に対して語る部分である。一方、「われ金剛身となる。」の部分は、逆に行者が諸仏に対して呼び掛ける部分である。つまり、本来であれば、行為の主体と客体が文章の途中で入れ替わるはずである。しかし、『即身義』の引用箇所は主体と客体の逆転が明確に示されていない。すなわち『三摩地法』の原文では、諸仏が行者に語りかけ、それに対して

行者が諸仏に答える、という流れであるが、『即身義』の内容では、諸仏の語りかけと、それに対する行者の答えではなく、行者の独白のみという印象をうける。『三摩地法』の原文では、諸仏が行者に対する語りかけを示す箇所が「なんじ」だけであり、分かり難いとも言えるが、三卷本の『教王経』では、「一切の如来は咸く告げていわく」という箇所があり、対話の主体と客体が非常に明らかである。しかしながら、『三摩地法』においても「堅実にして傾壊なし」のあと、「復た諸佛に白して言さく」という文字列が加わることで、行為の主体と客体が明確に示される。すなわち、『即身義』において、諸仏と行者の対話関係が明示されなかったのは、意図的であると考えられる。この意図は、次項で述べる、証金剛身の部分だけが引用された意図と非常に密接な関係があると言えるのである。

六、『即身義』における証金剛身の引用について

五相成身観のうち、なぜ、証金剛身の部分のみが引用されたか、という問題は古来、様々な解釈が加えられている。頼瑜、性心、宥快、小田慈舟などが、註釈の中で指摘を行っている。そして、特に、引用された部分が、なぜ、五番目の仏身円満ではなく、四番目の証金剛身であるか、という点が論議の対象となっている。

頼瑜の『即身成佛義顯得鈔』によれば、

答。或人云。五相成身者。謂法三羯之成身相。三自證。羯磨化他。今就自證而爲證耳今謂不爾。大師之引憑未必依顯相。所以金剛者智。界者身也。意行者自身即作持堅固不壞薩般若智者身爲言即作金剛不壞法身之義也。故知。文雖舉證金剛。意含第五佛身圓滿。⁽¹⁸⁾

性心の『即身義鈔』によれば、

答。五相開佛果之上。故全無淺深之殊。爲令人易解之故作次第說也。故五相文皆是可爲即身成佛本據。殊更今文即身成佛義分明也。其故云自身爲金剛堅實無傾壞。我爲金剛身故。⁽¹⁹⁾是則與佛身圓滿義同也。

宥快の『即身成仏義鈔』によれば、

以五相配三句時。第四成金剛。第五佛身圓滿。共是究竟也。於中第四正體智。自證。第五後得智。化他也。⁽²⁰⁾仍付正體智自證成佛證之也。

小田慈舟の『十卷章購説』によれば、

完全な仏身を現証することは第五の位にあると思うであろうが、実は五相成身は自証円満の上の徳相を次第して示したもので、何れの位にも即身成仏の義はあるが、即身成仏の義がよく顕れている証金剛身の文を、今引証せられたのである。⁽²¹⁾

これらの註釈を概括して言うならば、証金剛身の部分が最も即身成仏の境界を示していると解釈されている。しかし、この解釈こそが、『即身義』の本質を示していると言えるのである。『即身義』と、その註釈書において、具体的な行法、つまり、五相成身観に関して、具体的な行法は述べられていない。逆に言えば、即身成仏する方法について、言及していないということに他ならない。すなわち、この八箇の証文の第四句をはじめとして、『即身義』では即身成仏の境地が説かれてはいるが、即身成仏に至る具体的な方法論は示されていないのである。例えて言うならば、『即身義』とは即身成仏のマニュアルではなく、即身成仏という概念の提示に過ぎない。空海が示した即身成仏という概念とは、法身大日如来と一体となることであり、現代的な言葉を使うならば、法身を認識する行為であると言える。従って、大師は『即身義』において、五相成身観の中から、法身を認識する箇所である証金剛身の部分のみを取り上げたと推論できる。また、末釈では、

なぜ証金剛身か、という解釈は盛んに行われているが、なぜ、五相成身觀の行法を引用しなかったのか、という議論は行われていない。成仏するための過程、すなわち、その行為によってのみ、成仏できるはずの部分を、あえて引用しなかった理由を考えるべきであろう。

また、『即身義』において、『三摩地法』の引用に際し、なぜ、真言の引用を行わなかったのか、ということとは末釈において、触れられていない問題である。真言そのものに関しては、曇寂が『即身成仏義私記』において、証金剛身の真言について解釈を行っている。

曇寂の『即身成仏義私記』によれば、以下の様に眞言を解釈している。

次示眞言^{ㄅㄆㄇ}忌宴維者。^{ㄅㄆㄇ}忌宴金剛也。引點即^ㄅ字也。^ㄅ自也。我也。與^ㄅ與^ㄅ悔丑同身也。
 中有^ㄅ字。含爲作義。故總云自身爲金剛。此句即眞言句義也。⁽²²⁾

この曇寂の解釈は眞言の字義解釈だけであり、眞言の意味は「自身金剛となる。」という、眞言の直後の部分と同じ意味であると述べられている。なぜ『即身義』に、眞言が引用されなかったかという問題には触れていない。しかし、これまで述べてきた、証金剛身のみを引用した意図の解釈に準じて考えるならば、『即身義』の目的が即身成仏の境界を述べることであり、即身成仏の方法を述べるためではないから、眞言は引用しなかったと推測できる。また、さらに言えば、末釈においても、「眞言を唱える」という行為によって、どうなるかということは示されていないのである。

まとめ

以上、『十住心論』と『秘蔵宝鑰』における五相成身觀について考察を加えた上で、『即身義』の八箇の証

文の第四句における『三摩地法』の引用を考察した。

『十住心論』第九住心、『秘藏宝鑰』第九住心、『秘藏宝鑰』第十住心の『菩提心論』引用文中に引用される『教王経』の引用箇所は、ほぼ同じ部分、五相成身観の直前部分である。取意引用を含め、空海の著作中に『教王経』が引用されるのは、この部分だけである。『教王経』において、重要な部分はこの部分の直後から始まる五相成身観であるにも拘わらず、この部分だけを空海は引用する。この部分のみを引用するということは、五相成身観による一切如来との加持の境界を示すものの、その状態に至る方法である五相成身観の具体的内容や、五相成身の真言は示されないということである。つまり、空海は「自心を観察する三摩地」を示すただけに『教王経』を引用したのである。『教王経』に示される具体的な行法を示さず、その前段階の境界のみを説示していることは意図的であると考えられる。

また、空海は『即身義』において、『三摩地法』における五相成身観の証金剛身の箇所を引用した。この引用の意図は、即身成仏の境界を述べるためであり、五相成身観の行法を示すためではない。また、原典の一部を意図的に削除した理由は、即身成仏の境界を端的に述べるためである。すなわち、『即身義』において、『三摩地法』の五相成身観の一部を用いたのは、引用に際して、少し手を加えることで、即身成仏の境界を端的に示すことが出来るからである。従って、『即身義』において、三巻本の教王経ではなく、『三摩地法』が引用された理由は、五相成身観の行法を示す必要性が低かったからであると考えられる。

註

- (1) 弘法大師全集第一輯 三七三頁
- (2) 大正蔵一八 二〇七 下
- (3) 大正蔵一八 二〇七 下

空海の著作における五相成身観について（浅井）

- (4) 弘法大師全集第一輯 三七四頁
 - (5) 弘法大師全集第一輯 四六二頁
 - (6) 大正蔵一八 二〇七 下
 - (7) 弘法大師全集第一輯 四七一頁
 - (8) 大正蔵一八 二〇七 下
 - (9) 弘法大師全集第一輯 一二七頁
 - (10) 弘法大師全集第一輯 三七四頁
 - (11) 弘法大師全集第一輯 四六九頁
 - (12) 弘法大師全集第一輯 七〇八頁
 - (13) 弘法大師全集第一輯 五〇六頁
 - (14) 大正蔵一八 三二九 上
 - (15) 大正蔵一八 二〇八 上
 - (16) 真言宗全書卷一三 二〇〇頁 上
 - (17) 小田慈舟 『十卷章購説』上卷 二七頁
 - (18) 真言宗全書卷一三 一八頁 下
 - (19) 真言宗全書卷一三 九四頁 下
 - (20) 真言宗全書卷一三 一九九頁 下
 - (21) 小田慈舟 『十卷章購説』上卷 二七頁
 - (22) 真言宗全書卷一三 三三一頁 下
- 【キーワード】 空海、五相成身観、『即身成仏義』、『三摩地法』、引用